猪苗代湖北地方における
農村家屋形態の特色と変貌

杉　浦　　直

筆者は，東北地方の農村家屋[1]形態に関する一連の研究を報告してきた（1973, 1975, 1977a, b, SUGIURA 1975 及び高橋・杉浦1977）が，本稿ではその一環として，福島県猪苗代湖北地方を取り上げ，農村家屋形態の地域的特色，特に家屋タイプ（house type）の分布，と近年におけるその変貌を把握し，東北地方における家屋タイプの分布論的認識に資するとともに，農村集落の諸条件や生活様式との関係における家屋形態の動態的考察を深める一助としたい。同地方の3集落については，すでに建物構成方式の成立に関する拙論（1977b）の中で，会津地方の事例として取り上げたが，ここでは，その後の調査による資料を中心に，より広い角度から同地方の農村家屋形態に関する検討を行なう。

I　対象地域と資料

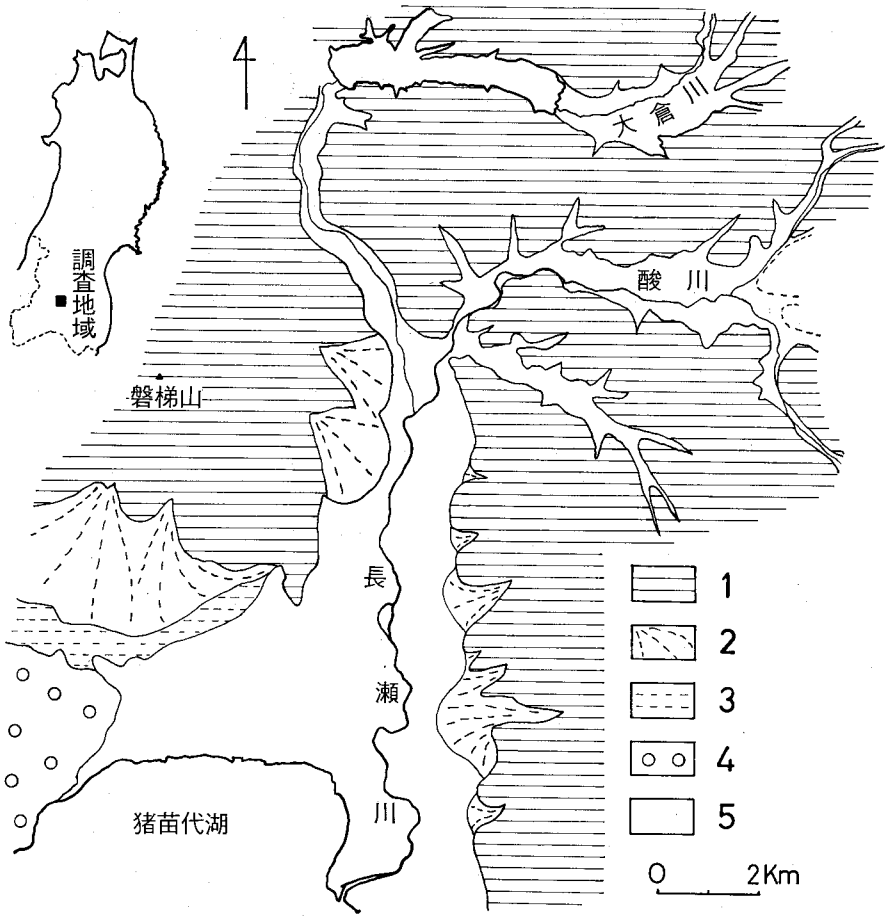
1.　対象地域の概況

本研究の対象地域は，猪苗代盆地の北半，すなわち猪苗代湖北岸平野（以下，湖北平野）一帯に，北縁の山間部を併せた範囲である（第1図参照）。行政的には，現在福島県耶麻郡猪苗代町に属し，平野部は旧猪苗代町，長瀬村，千里村，翁島村東部及び月輪村の1部に，北縁山間部は旧吾妻村に，ほぼ相当する。

まず，地形の概況を見よう（第1図）。湖北平野は，東縁を川桁断層崖，北西縁を磐梯山麓の裾野，西縁を翁島泥流丘陵で限られた，ほぼ三角形の地域である。平野内の主要部分は長瀬川の沖積低地で，南半は三角州性の平野，北部は谷底平野的な性格と考えられる。なお，長瀬川沿いには自然堤防，川桁断層崖下にはいくつかの小規模な扇状地が発達し，磐梯山麓には湖成段丘（中村1958）乃至 alluvial cone（FURUYA 1965）と解されている緩傾斜面が存在する。北縁山間部（吾妻地区）は，磐梯山と吾妻連峰の中間に位置する山地性の地域で，長瀬川及びその支流の大倉川，酸川のやや広い谷底平野をもつ。

集落の分布を見ると，平野部で密に発達し，山間部ではやや疎になる。平野部の集落については，安田（1952）の研究があり，古村と新田集落の配置が記されているが，それによると，長瀬川沿いの自然堤防上の集落や，猪苗代裏街道[2]に沿う集落などは，中世より

1）農村地域における一般住民の家屋（住居，民家）。主として農民家屋。
2）猪苗代町から戸ノ口，十六橋を経て若松に通ずる街道（安田1952）。



第1図　調査地域と地形の概況
1：山地　2：扇状地，山麓緩斜面
3：段丘面（？）　4：泥流地域
5：沖積低地

の古村であり，平野中央部の低湿地帯や磐梯山麓の緩斜地等に新田集落が多くなっている。なお，集落の形態は，いずれも集村で，塊村状のものが最も多く，1部列村（路村）状となっている。

次に，土地利用及び農業経営上の特色を見よう。平野部の沖積低地はほとんどが水田であり，平野内各集落の水田率は85～90％程度を示す[3]。山間部の谷底の諸集落は70％前後となる。畑地は，特に川桁断層崖下の扇状地面と，磐梯山麓の緩斜面に集中しており，タバコ，トマトその他が栽培されている。集落は，中心集落たる猪苗代を除くと，ほとんどが農業的集落であり，特に平野部の諸集落は，豊かな水田農業集落である。1戸当り平均耕地面積を見ると，平野部の集落はほとんどが1.5ha以上であり，2.0ha以上も多い。吾妻

3）以下，数値は，1975年世界農林業センサス農業集落別一覧表（猪苗代町役場総務課）に基づいた。

地区山間部は，それに対して平均1.03haになり，達沢，高森，千貫といった上流部の集落では，特に低くなる。

2.　調査資料

本研究の資料は，主として２つの種類に大別される。１つは役場税務課から得た各戸の家屋関係資料，もう１つは現地フィールド調査により得たものである。以下，それぞれについて簡単に説明しよう。

猪苗代町役場税務課の家屋課税台帳には，各戸の母屋・付属舎についての面積（建坪），建築年代等の記載，さらに付図として母屋及び主要付属舎の平面図（間取り図）があり，閲覧を許されたので，これを地域的差異を把握する基礎資料として使用した。また，この資料は幸い昭和30年前半の一斉調査以後増改築・取りこわしがあるごとに記載の変更が行なわれており，伝統的家屋から現在までの変貌の状態を辿ることもできる。資料は，猪苗代町内につきほとんど全戸にわたってあるが，数が膨大となるため，そのうち38集落計841戸について閲覧・分析を行なった。なお，役場からは，農業関係統計，土地改良等諸事情に関する各種の資料も得た。以上の調査の主要部分は，1978年から79年にかけて行なったが，１部は以前（75年以降）から継続のものもある。

現地フィールド調査は，1974年より79年まで，筆者指導による学生実習を含めて，大在家，新在家，西真行，釜井，北烏帽子，南烏帽子，島田，祢次（上祢次，下祢次），五十軒の９集落について行ったが，ここで使用する資料は，主として祢次部落に関するものであり，その他前稿（1977b）で報告した大在家，新在家，西真行部落に関するものを加えた。現地調査にあたっては，集落内各戸の建物配置図を作成する他，建物建築年代，増改築の時期等，家屋形態の変化に関する聴取に特に力を入れた。

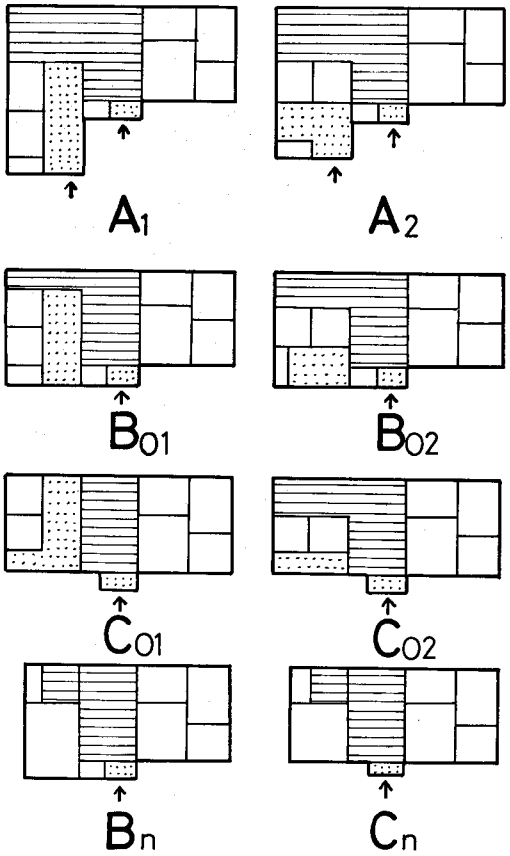
Ⅱ　家屋タイプの分布

1.　家屋タイプの設定

家屋形態の分布や変化を把握する手段として，その平面（間取り）形態を中心に，第２図のような家屋タイプの分類を試みた。この分類は，本地域の農村家屋形態の特色とその変化を把握し得るよう，特にドマニワ部や厩等の機能空間の構成を中心に考えた便宜的なものである。以下，各タイプを簡単に説明すると；

A：前面に大型突出部をもつ，いわゆる中門造民家のタイプである。厩が１区画乃至２つ縦に（梁間方向に）並んでいる普通の厩中門（A_1）の他，厩が２つ横に（桁行方向に）並んで，奥に引っ込んだタイプ（A_2）が区別される。

B：ドマニワ部(勝手側)の前面に，下屋万至葺き下げ部が延びて拡大されているタイプ。



第２図　家屋タイプ模式図

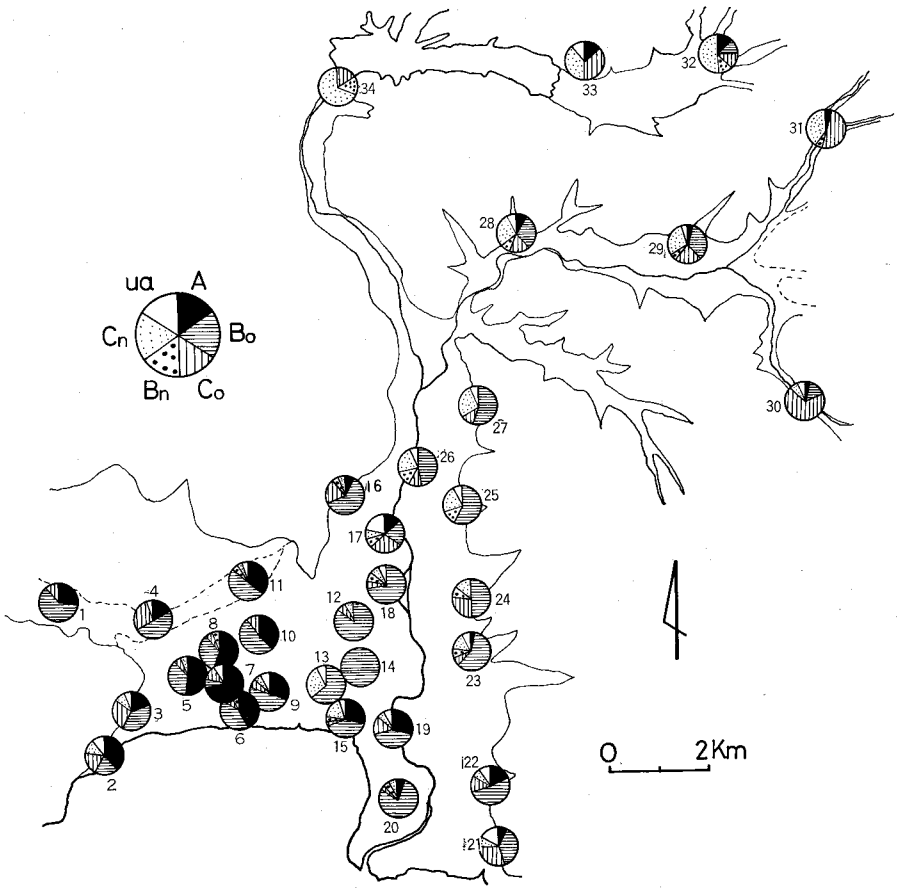
母屋内部に広いドマニワ部をもつ古いタイプ（B_o）と，土間がほとんど消失した新しいタイプ（B_n）とに分かれる。B_o タイプは内厩をもつ場合が多く，厩のつき方によって，やはり縦並び型（B_{o1}），横並び型（B_{o2}）を区別できる。

C：前方下屋張り出しのない，完全な直家（玄関等の小突出部はもつ）。同じく，古いタイプ（C_o）と新しいタイプ（C_n）とに分かれる。C_oタイプで内厩をもつ場合は，同様に縦並び型（C_{o1}）と横並び型（C_{o2}）を区別できる。

なお，以上に入らないタイプ（例えば，妻入り家屋のタイプ等）を，その他（記号 ua）として区別した。

2．家屋タイプの分布

次に，猪苗代町役場税務課作成の家屋課税台帳付図（家屋平面図）を使用して，各戸の母屋を上記の各家屋タイプに分類し，その地域的分布を考察する。分類を行なった集落は，対象地域から選んだ38集落であるが，統計的に把握する単位としては，２，３の戸数の少



第３図　家屋タイプの分布（昭和30年代前半）
１：土田　２：蟹沢　３：西久保　４：五十軒　５：新在家
６：東真行・南真行　７：西真行　８：大在家　９：北烏帽子・南烏帽子　10：島田　11：祢次　12：北高野　13：廻谷地　14：富永　15：堅田　16：見祢　17：新堀向（船場）
18：今泉・東谷地　19：中ノ目　20：小平潟　21：関脇
22：都沢　23：白津　24：内野　25：志津　26：伯父ケ倉
27：小水沢　28：田茂沢　29：大原　30：達沢　31：高森
32：蒲谷地・西高森　33：大島原・金堀　34：千貫

ない集落を近隣のものに一括し，全体で34とした（第３図参照）。対象家屋は，これら集落の農家世帯の家屋全数を原則とし，各戸のうち旅館，工場，店及び付属舎をもたない専用住宅のみの家屋を除いた全戸（昭和52年現在で841戸[4]）としたが，台帳に農家世帯か否かの記載がないため，この中には農家以外のものも含まれていると思われる。

1）昭和30年代前半の分布

まず，各戸の台帳に付属している家屋（母屋）平面図のうち，最も古いものを分類した

4）なお，家屋平面図の欠落が若干あるため，タイプ分類の有効戸数は，これよりやや少なくなる。

結果を第3図に示した。最初の間取り一斉調査の時期がはっきりしないため，これが何時の年次の状態か，厳密には定められないが，台帳には昭和34年以降の改築の記載があるので，ほぼ昭和30年代前半の状態を示すと考えられる。図は，集落ごとの各タイプ（A，B_o，C_o，B_n，C_n，ua の6分類）の割合を示した。これによって，我々は近年の大きな変貌以前の家屋タイプの分布を考察することができる。

図を見るに，まず全般的に言って，どの集落でも古いタイプ（A，B_o，C_o）の家屋が多数を占める。特に，平野部の諸集落でその傾向が強く，山間部（吾妻地区）に行くと，新しいタイプ（特に C_n）もかなり増加する。しかし，これは山間部で農村家屋の近代化がより進んでいることを意味するのではなく，ドマニワ部の少ない非農家的な家屋が多いためと解される。A（中門造民家）は，長瀬川以西の平野部西半に多く，特に大在家，新在家，西真行部落のあたりで高密度になっている。長瀬川以東や吾妻地区山間部では，きわめて少なくなり，全くこれを欠く集落も多い。B_o は，平野部東半に特に多く，吾妻地区に行くと，C_o がむしろ多くなる。なお，A，B_o，C_o には，前述の如く縦並び型（A_1 B_{o1}，C_{o1}）と横並び型（A_2，B_{o2}，C_{o2}）とがあるが，その分布傾向ははっきりしない。一般に，縦並び型のみの集落と両者併存の集落とがあり，A_2 がある集落は B_{o2}，C_{o2} もあるのが一般的である。なお，横並び型のみの集落は富永（B_{o2} が10戸）のみである。

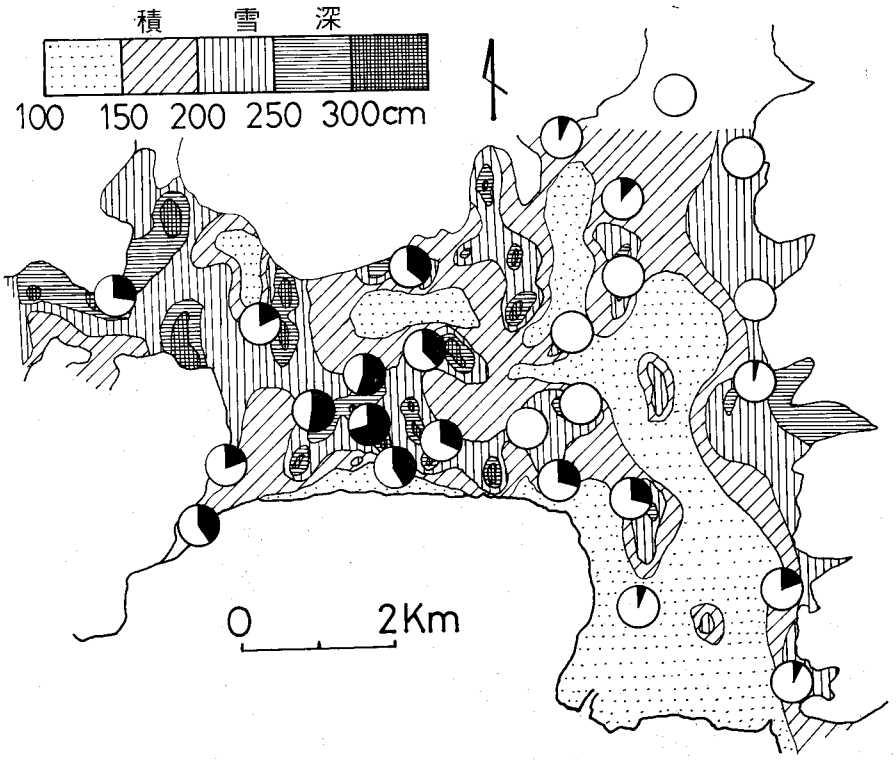
ここで，特に中門造民家（A）の分布に注目し，その意味を考察して見よう。会津地方全域に関する中門造民家の分布に関しては，すでに海老沢（1966）及び米田（1973）の研究がある。前者は2万5千分の1地形図によって，後者はサンプル集落の現地調査によって，それぞれ中門造民家の割合を示す分布図を作成している。猪苗代湖北地方に関しては，海老沢の分布図において，小縮尺の図ながら西半に高密度地をもつ湖北平野内の地域差を読み取ることができ，その意味では筆者の結果はそれをより詳細に確認したことになる。

本地域における中門造民家の分布に関して顕著な特色は，狭い範囲内で著しくその密度が変化することであり，また一般に中門造民家は山間部で多くなる傾向をもつにもかかわらず，本地域の吾妻地区山間部では，きわめて少なくなることも，注目される。本地域のように限られた範囲内におけるこのような地域的傾向を適確に解釈することは難しいが，ここでは一応，次の2つの要因を考えてみよう。

まず，積雪との関係という問題を取り上げる。中門造民家は，深雪地帯に適応した家屋形態であると言われており，その分布密度と積雪量との間には，密接な関係があることが知られている。特に，かなり広範囲の地域でこの関係を見た場合，一般に山間部の方が平地部より積雪が多く，中門造の割合も高くなっている傾向が見られ，これは新潟県で須藤（1955），米田（1975），山形県で小野（1959），秋田県横手盆地南部で筆者他（高橋・杉浦1977），また会津地方に関して海老沢（1966），米田（1973）が確かめた通りである。しかし，

本研究で問題にしている猪苗代湖北地方内部での地域差は，よりスケールの小さい現象であり，積雪分布も局地的な差異を問題にする必要がある。湖北平野における積雪分布に関しては，幸い設楽　寛氏の調査[5](1976)があり，長瀬川以西の平野北西部から南東に走る多雪地帯の存在が明らかにされている。今，氏による1974—75年の積雪分布の資料[6]と昭和30年代前半の中門造民家の割合の分布とを比較して見ると（第4図），平野部内に関しては多雪地帯と中門造高密度地域とのある程度の一致を見ることができる。しかし，吾妻地区山間部に関しては積雪分布の資料がないので，上述の関係を議論することができない。

次に，文化伝播或いは文化圏といった側面からの解釈の可能性を考えて見よう。会津地方の中門造は，越後系統のものと言われている（杉本1969，p. 140）が，いずれにしても猪苗代湖北地方は，裏日本系民家の分布地域の縁辺にあたっている[7]。長瀬川以東の地域



第4図　中門造民家の分布と積雪深
積雪深分布は，設楽　寛氏の資料（東北地理学会1976年度春季学術大会にて発表）による。

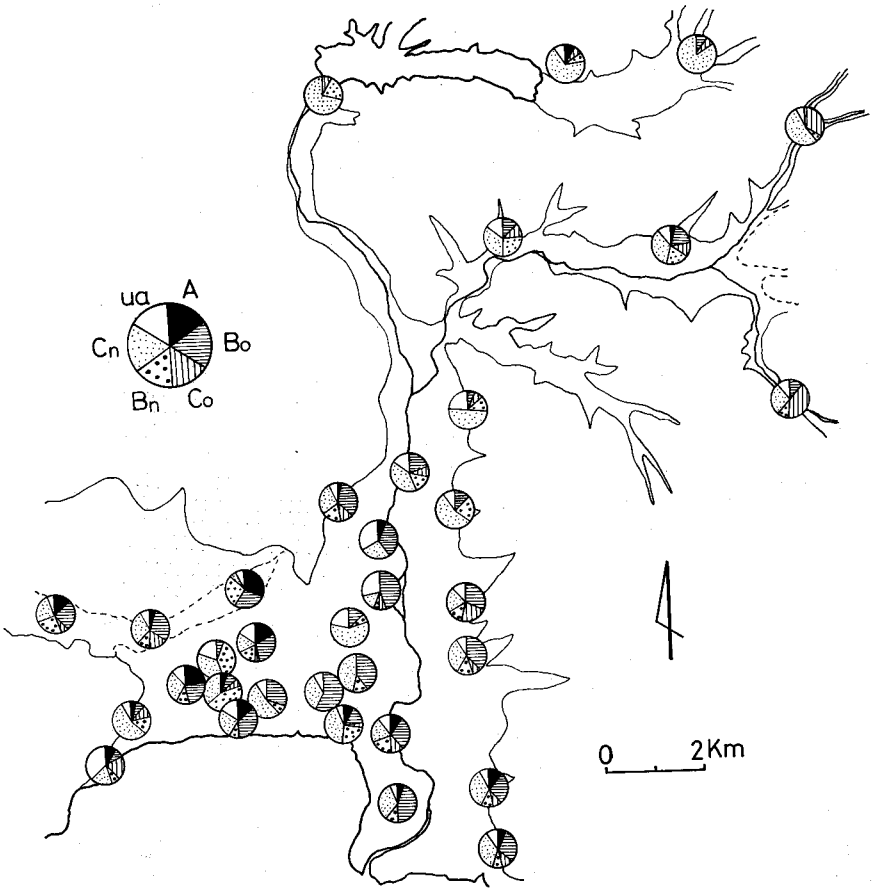
5）暖候季において住民の記憶に基づく聴取り法によったもの（設楽1976）。
6）積雪深の分布は特定の年次のものであり，年による積雪の多寡は当然あるが，積雪の地域的パターンそのものはあまり変化しないものと考えて議論する。
7）ちなみに，田辺（1974，p.311）は「入母屋や角屋と寄棟との境は，南では奥羽山地中の猪苗代盆地中にある」旨を述べている。

で，中門造民家がほとんど見られなくなるのは，ここが裏日本系文化事象の分布縁辺地域にあたっており，集落による差が著しいのも，そこにおける特徴的な現象として考えることもできよう。

2） 現在の分布

第5図に，現在の家屋タイプの分布を示した。これは，家屋課税台帳付図の母屋間取り図のうち，新改築されたものについては，最新のものを使用・分類した結果である。調査時が1978～79年であり，前年までの新改築が記載されるので，ほぼ1977年（昭和52年）の状態を示すと考えてよい。

各タイプの分布傾向を見るに，まずほとんどの集落で古いタイプ（A，B_o，C_o）の家屋が減少し，過半が新しいタイプ（B_n，C_n，ua）になっているのが目につく。A（中門造）は，平野部北西のいくつかの集落でいくぶん残存している他は，ほとんど無くなってきている。古いタイプで多いのは B_o で，平野部では20～40％程度の割合を占めるが，吾妻地区山間部では少なくなる。B_n は，平野部西半の1部でやや多い他は，全般に比較的少な



第5図　家屋タイプの分布（昭和52年）

く，新しいタイプでは C_n が多くなる。

このように，現在の農村家屋タイプの分布は，新旧の型が入り混っており，急激な家屋形態変貌の過程における一時期の様相としてとらえることができよう。

Ⅲ　家屋形態の特色と変貌

第3図と第5図との比較にも示される如く，近年の農村家屋の変貌は著しい。我々の次の課題は，この変貌の過程を把握し，農村家屋を動態的な存在として認識することにある。本地域における農村家屋形態の変化に関しては，前述の如く平野部の9集落において現地フィールド調査を行ない，そのうち大在家，新在家，西真行の3集落に関しては，前稿（1977b）において付属舎構成の変化を中心に報告した。本稿では，最もよく資料が揃った祢次部落[8]の例を中心に，農村家屋形態の特色と変貌の過程を考察しよう。

1.　母屋形態の変化

母屋は，農家の屋敷を構成する建物のうち，外観的にも機能的にも，最も重要なものと言ってよい。従って，近年の農村家屋形態の変貌を考える時，母屋の著しい変化をまず第一に考える場合が多く，我々の使用した家屋タイプ分類も，また母屋についてのそれである[9]。ここでは，この母屋形態の変貌を，特に内部間取り形態の変化を中心に考えてみよう。

まず，母屋面積の変化を見る。役場資料による1戸当り母屋面積[10]を見ると，昭和30年代前半において，平野部諸集落47.00坪，山間部（吾妻地区）で28.99坪，現在は平野部51.21坪，山間部32.38坪と，ともに10％程度増加している。これは，家屋の増築や2階建て家屋の増加によるものと思われるが，その内容に関しては個々の事例にあたる必要がある。

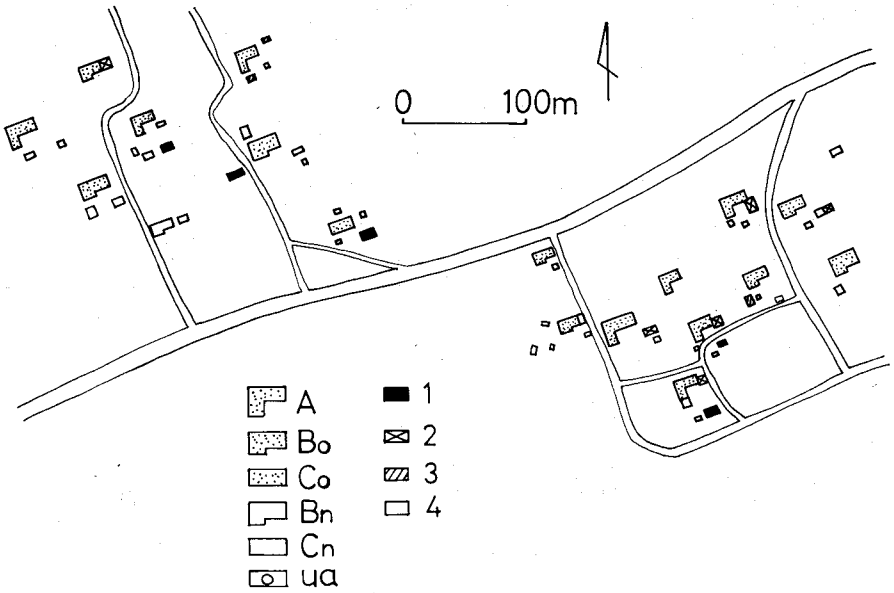
家屋タイプ（母屋タイプ）の構成の変化については，すでに第3図と第5図との比較において述べた通りである。ここでは，さらに具体的に考えるため，祢次部落の家屋形態の変化を，第6図—(1)，(2)において示そう。(2)は現地調査から得た現在（昭和52年）の状態，(1)は現状を基礎に聴取と役場資料から復原した昭和30年代前半の状態である[11]。昭和30年

8）祢次部落は，磐梯山の南麓に位置し，上祢次と下祢次とに分れる。上祢次8戸，下祢次10戸，計18戸で構成され，全戸が農家である。平均耕地面積2.49町，ほぼ90％が水田である。各戸の耕地面積は第1表を参照されたい。

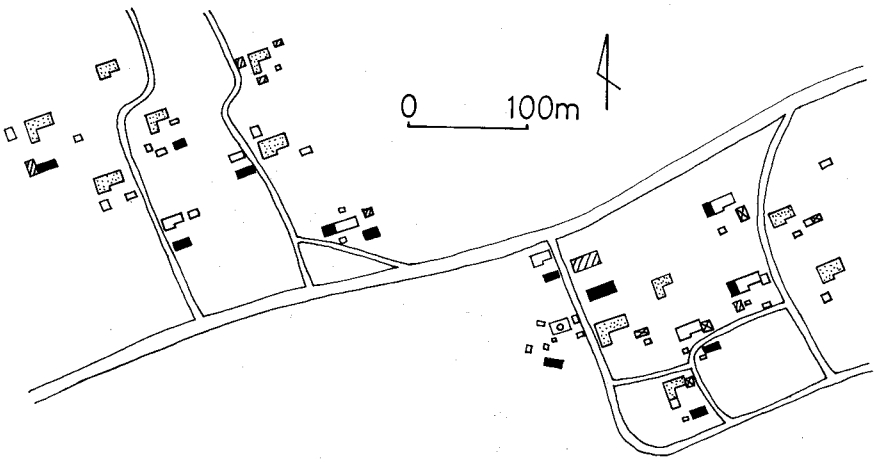
9）ちなみに，佐藤（1957）も「民家という語は，多分に……住家＝主屋（おもや）の建築それ自体に重点がおかれて使用されている」旨を述べている。

10）2階部を含めた総建坪。

11）図は，略図であり，方位・縮尺は厳密ではない。資料の不備或は限界により，若干の誤認・遺漏があるものと思われる。



第6図—(1) 祢次部落の家屋形態（昭和30年代前半）
1：作業舎　2：土蔵　3：畜舎　4：その他の付属舎



第6図—(2) 祢次部落の家屋形態（昭和52年）
凡例は，第6図—(1)と同じ。

代前半においては，ほとんどが古いタイプの母屋であり，そのうち8戸が中門造民家と見做される。昭和52年現在においては，7戸が新しいタイプ（ほとんどが B_n）となっている。

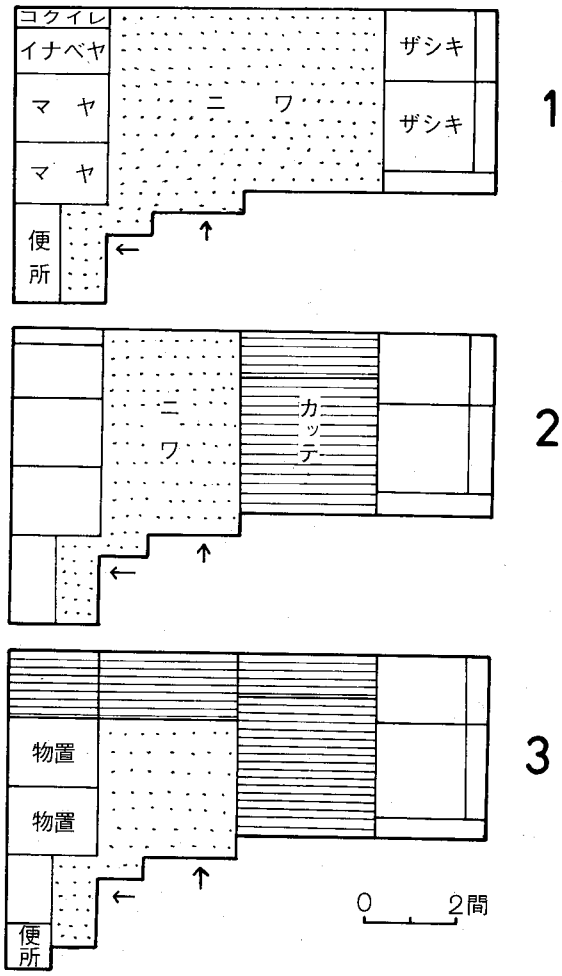
このような家屋タイプの変化は，大規模な増改築或いは建て替え新築によって生ずるが，古いタイプとして残存している家屋であっても，様々な改造が為され，完全に昔のままの家屋は，きわめて少ない。そのような家屋の増改築の状況と年次を祢次部落について聴取及び役場資料から判明する限り示し，耕地規模と対照したのが，第1表である。会津地方においては，家屋の新築よりも，むしろ増改築が多いことは，すでに前稿（1977b）で述べ

第1表　祢次部落（上祢次・下祢次）家屋形態の変化

農家	耕地面積（反）	母屋建築年次と母屋面積（坪）の変化	母屋の改造		主要付属舎の動向
			大きな改造	部分的な改造	
1	51.40	59.00(M2)			S23作業舎，物置建設
2	48.42	43.68(T8)→62.35(S34＋T8)	S34居住部分建て替え（土間部を接続作業舎として残す）		S23作業舎建設
3	36.57	29.25(S30)→19.28(S30)＋30.13(S47)	S47座敷部分建て替え		S41作業舎（兼畜舎，車庫）建設
4	34.11	57.30(江戸)→55.80(江戸)		中門縮少(S42)	S42作業舎建設
5	33.70	57.41(M35)		S31玄関，風呂場改造，S35台所	S10年代作業舎建設，S41畜舎建設
6	32.36	57.66(M2)		S45残存土間を板じき化	S33作業舎建設
7	29.59	60.50(M1)→66.00(M1＋S35)	S35厩，台所等全面改造（土間部を接続作業舎として残す）		
8	29.57	56.66(M22)		S42ごろ，茶の間の天井を張る	S41畜舎建設
9	25.93	56.00(安政6)→51.95(安政6)	S42ごろ，中門除去，土間板じき化，玄関改造	S50台所，便所，風呂場改造	S42作業舎（機械小屋）建設
10	25.16	74.41(江戸)		S51台所，便所改造	
11	22.24	61.25(M12)→42.75(M12)＋5.13(S46)	S46旧厩部建て替え		S42作業舎建設，S51はなれ併接
12	20.82	56.00(江戸)	S25中門除去，玄関設置		
13	16.37	44.75(安政6)→49.87(安政6＋S43)	S43勝手側半分建て替え（一部接続作業舎に改造）		
14	10.91	65.05(M40)		S35厩部，板じき化	
15	9.99	59.00(T8)→29.50(T8)＋22.54(S48)	S48全面的に増改築		S42作業舎建設
16	8.38	36.25(M37)→15.75(M37)＋30.91(S47)	S47勝手側半分建て替え		
17	8.25	34.75(T13)→34.75(T13)＋14.60(S48)	S48座敷部分建て替え		
18	3.71	49.00(江戸)			

たが，表に見るように祢次部落では完全な建て替え新築はなく，いずれも大型増改築の段階に留っている。一般に，表に示した「大きな改造」においては，中門部の除去や茶の間・台所改善による土間部の減少によって，家屋タイプが変化している。しかし，座敷部分のみを改造する場合は，かなり大規模な改築であっても，一般に家屋タイプは変わらない。部分的な改造としては，台所，浴舎，便所等日常生活行為空間の変化が多い。

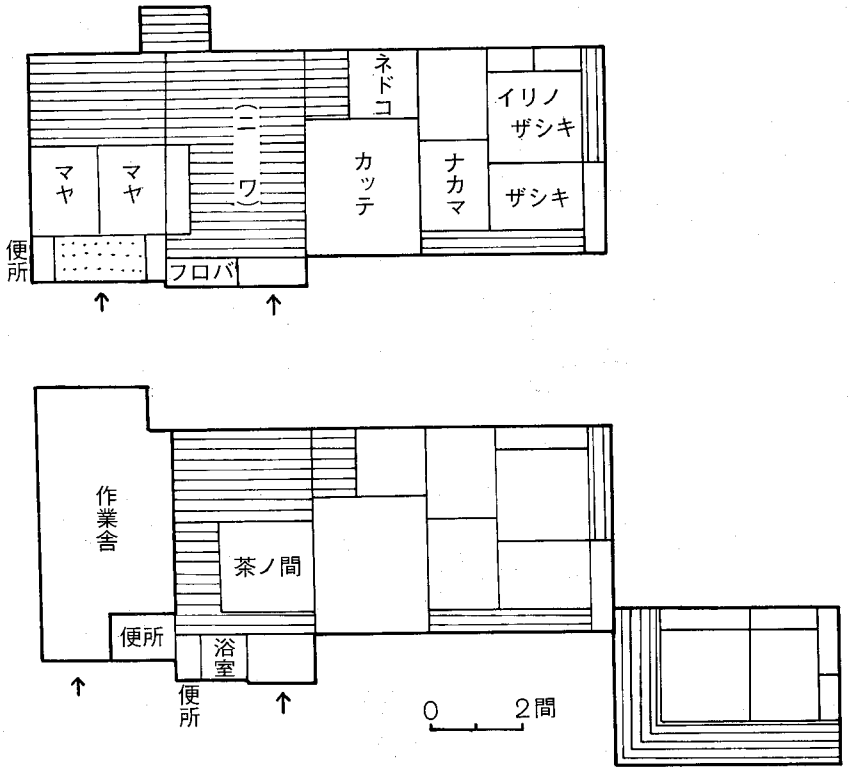
農村家屋は，一般に単なる居住舎ではなく，農業生産活動と密接に関連しつつ成立するので，個々の家屋の状態を規定する重要な要因の１つに，農業経営規模（一応，耕作規模で代表する）が考えられる。筆者は，すでに前稿（1977b）において，付属舎の構成及びその変化と，耕作規模（耕地面積）との間に密接な関連があることを示したが，母屋の新改築においても耕作規模との関連が注目される。祢次部落の例においては，表に見る如く増改築が耕地面積の小さい農家にまで及んでおり，耕作規模と増改築内容との明瞭な関連は



第７図—(1) 祢次部落農家事例（Ｉ）
１：明治７年以前の状態　２：明治７年～昭和30年　３：昭和30～52年

必ずしも見られない。しかし，増改築の時期を見ると，耕地面積の小さい農家の増改築は昭和40年代の後半に集中しており，耕作規模の大きい農家では30年代から変化が見られる傾向が，一応指摘できそうである。

次に，いくつかの事例農家について，こうした母屋の変化を，より具体的に見ていこう。第7図—(1)は，祢次（下祢次）部落の一農家の母屋間取りの変遷を示したものである。この家は，現在水田3.37反，畑0.34反，祢次部落で最も耕作規模が小さく，昭和52年まで伝統的な中門造民家として残っていた。しかし，図に見る如く，中門部はかなり小さく，入口が横についていた点が，やや特殊である。厩は縦並び型（A_1）であるが，奥に引っ込んでいるところを見ると，最初 B_{01} 型で，後に中門部が付加された可能性が強い[12]。内部の間取りを見ると，現在なお入口（トンボグチ）の奥にドマニワを残しているが，厩はすでに使われていない。ドマニワの奥の板敷部は，昭和30年に板間化されたものであり，さら



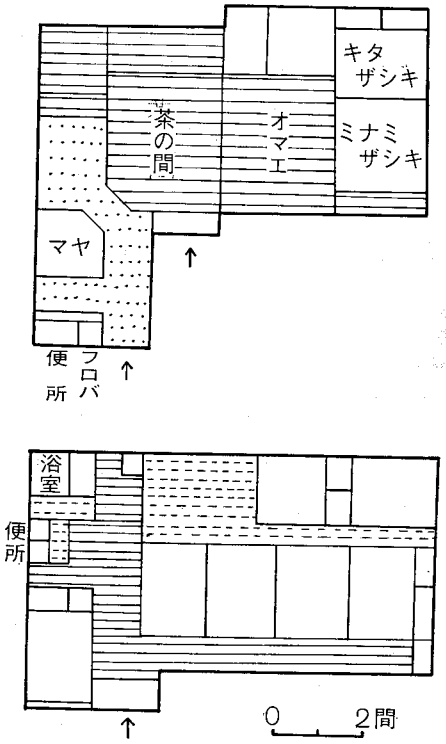
第7図—(2)　祢次部落農家事例（Ⅱ）
上：昭和2年～46年の状態　下：昭和46年の改築以降（1部は51年以降）

12）中門部の付加については，この家では確認できなかったが，他に多くの事例があり，特に2階建てになっている中門は，明治頃後設したものが多いようである。猪苗代町公民館敷地内に移築復原された旧山内家民家も，移築前砂川部落（五十軒部落のすぐ南）にあった時は中門造り（A_{02}）であったが，復原研究によって以前直家（B_{02}）であったことが判明し，当時の姿に戻されたという（草野1974，p. 119参照）。

に現在の「かって」と呼ばれる広間は，明治７年に板間化されたということなので，それ以前は図に示した如く，家の過半が土間部のいわゆる地床住居であったと推定される[13]。なお，この家は53年には，中門部を含む母屋左手部分を取りこわし，接続作業舎（納屋）を新たに設けている。

第７図―(2)は，やはり下祢次部落の農家である。水田 2.15町，畑 0.7反，この地域では標準的な中規模農であり，酪農も導入している。母屋は明治12年の建築であり，ドマニワは昭和２年にすでに板間化され，図（上）に示す状態となった。厩が横に並んだ，B_{o2} 型の母屋であったが，昭和46年に大改築を行ない，図（下）に示す如く接続作業舎をもつ B_n 型の現在の状態となった。なお，右手の離れは，昭和51年に増築したものである。

第７図―(3)は，大在家部落の農家で，母屋の建て替え新築を行った例である。水田2.03町，畑1.1反，やはり中規模の稲作農家である。昭和46年にとりこわされた，以前の母屋は，



第７図―(3)　大在家部落農家事例
上：旧母屋，昭和46年とりこわし
下：新母屋，昭和46年新築

13）ちなみに，小水沢の１農家では，大正時代まで，お前（勝手，茶の間）が土間であり，筵を敷いてあったと言う（「猪苗代町誌・民俗編」p. 26）。

典型的な厩中門造（A_1）であり，江戸末期に建築されたものという。新築後の母屋は[14]，図に見るように B_n 型，玄関横の居室，近代化された台所，浴室，便所等をもつ純居宅であり，この地域の新築農家の典型的な形態を現わしている。

以上の例に示される如く，母屋は家屋タイプの上では，$A \rightarrow B_n$（or C_n），$B_o \rightarrow B_n$（or C_n）或いは $A \rightarrow B_o \rightarrow B_n$(or C_n）または $B_o \rightarrow A \rightarrow B_n$(or C_n）のような変化をするのが一般的であるが，これを機能的に見れば，内厩，作業用ドマニワをもつ複合機能空間としての母屋から，純居住用空間としての母屋に変化する過程として，とらえることができる。

2．付属建物とその構成の変化

付属建物（付属舎）は，言うまでもなく，母屋とともに農村家屋を構成する重要な空間である。それは，一般に作業・収納・飼育等の空間，或いは日常生活行為のための空間を含み，母屋と補完し合って農家の家屋機能を完成させる。従って，付属舎とその構成の変化は，農村家屋の変貌を考える際，不可欠の要素であるばかりでなく，母屋自体の変化にも密接な関係をもつ。この問題に関して筆者（1977b）は，すでに猪苗代湖北地方の３集落（大在家，新在家，西真行）の事例を含む考察結果を報告したが，ここでは本地域に関するさらにいくつかの資料を提示し，実態をより明確にしたい。

まず，役場資料による38集落について，付属建物構成の概況を数値的に見よう（第２表）。平野部と山間部では，全体的に付属舎の占める規模に違いがあり，それぞれの数値が山間部で低くでている。１戸当りの付属建物数から見て，当該地方が東北地方の中でも寡棟地域に属することは明らかで，特に山間部でその傾向が強い。昭和30年代前半と現在（昭和52年）とを比較すると，１戸当り付属舎数及び付属舎面積が増加しており，母屋を含めた建物総面積に占める付属舎の割合も大きくなっていることが注目される。平野部においては特に付属舎が母屋と拮抗するだけの面積をもち，屋敷内における付属建物空間の重要性が増したことを物語っている。

第２表　付属建物構成の変化

	平野部		山間部	
	昭和30年代前半	現在（昭和52年）	昭和30年代前半	現在（昭和52年）
戸数	654	675	158	166
１戸当り付属建物数	2.02	2.47	0.70	1.25
１戸当り付属建物面積	31.26坪	48.35	7.11	17.06
付属建物１棟当り面積	15.44坪	19.59	10.12	13.68
建物総面積に占める付属舎の割合	39.96%	48.73	20.26	34.35

14）この家屋の間取りは，前稿（1977b）第11図においても示した。

第3表　新在家部落付属建物構成の変化

農家	昭和10年代				昭和30年代前半					現在（昭和50）					
	作業舎	倉	物置等	その他	作業舎	倉	物置等	鶏舎	その他	作業舎	倉	物置等	鶏舎	車庫	その他
1	○				○					○					
2	○		○	浴舎	○		○○			○		○	○		
3												○			
4		○				○				○$_1$	○	○		○$_1$	
5	○	○			○	○				○	○				
6					○					<u>○$_1$</u>		○$_1$ ○$_2$	○$_2$	<u>○$_1$</u>	
7					○					○$_1$		○$_1$	○	○	
8	○	○	○			○	○			○		○		○	
9		○	○			○	○			○	○			○	
10	○	○	○		○	○	○			○$_1$	○$_2$			○$_1$	ワラ小屋$_2$
11					○					○$_1$		○$_1$		○	
12	○				○		○	○		○$_1$		○$_1$		○$_2$	みそ倉$_2$
13		○					○○		木小屋	○		○		○	みそ倉
14	○				○			○		○		○$_1$			<u>木小屋</u>,みそ倉$_1$
15	○		○		○		○	○		○$_1$					ワラ小屋
16			○○				○○			○$_1$		○○		○$_1$	
17	○									○$_1$			○	○$_1$	

アンダーライン：母屋接続，同一数字：棟接続

このような付属舎構成の変化，付属舎の増設の様子を，より具体的に見よう。第3表は，新在家部落の付属建物構成の変化を見たものである[15]。各種の付属舎のうち，規模の上からも機能の上からも最も重要と考えられるものは作業舎で，表によれば昭和30年代以降の増設が特に目につく。これらの作業舎は，いずれも大型で，作業機能の他，機械類等の収納を重要な機能としており，また畜舎（主に牛）をその内部に含む場合もある。物置等の小規模な収納的付属舎は，30年以前から増加の傾向にあった。なお，浴舎等小規模な建物で現在までにとりこわされたものがあったと思われるが，正確には把握できない。

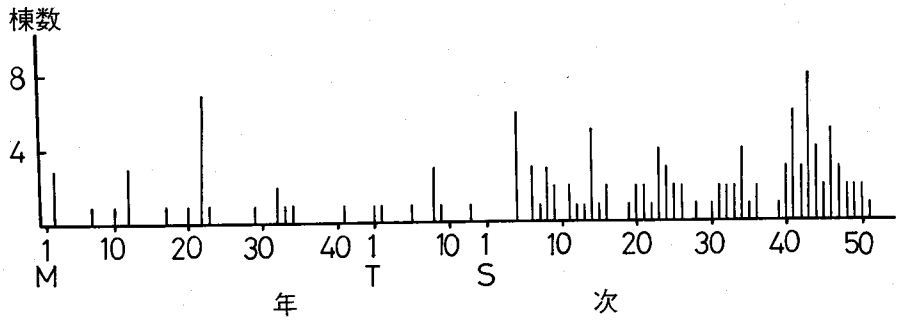
祢次部落の場合を見ても，同様に大型作業舎の建設が顕著な現象として目につく（第6図—(1)，(2)，第1表，参照）。第1表から，特に耕作規模との関係を見ると，上位の農家に建設が集中しており，しかも昭和40年以前の建設は上位の階層に限られていることが注目される。すなわち，耕作規模との関係は母屋の場合より明確で，これは作業舎が作業・収納等直接生産機能と結びついた空間であることを考えれば当然と言えよう。

なお，各種付属舎の建築年代を，大在家・新在家・西真行部落及び祢次部落についてまとめて見ると，第4表のようになる。全体として，倉・物置等の収納用付属舎は早くから建設されており，作業舎は近年，特に40年以降急増している傾向が明らかである。また，

15）表における昭和10年代及び30年代前半の付属建物構成の復原は，役場資料及び聴取によった。これらについては資料の関係上，昭和50年の項に示した様な形態の詳細（母屋接続，棟接続等）が不明であり，また小規模なものについては遺漏があるものと思われる。

第4表　付　属　舎　建　築　年　代

		作業舎	倉	物置穀入れ等	車庫	その他
大在家・新在家・西真行	明治		8	2		
	大正	1	3	3		
	S 1～9	7		4		鶏舎1
	10～19	5		3		浴舎1
	20～29	7		3		
	30～39	7		5		畜舎1，浴舎1
	40～	16		5	9	畜舎1
上祢次・下祢次	明治		5	3		いんきょ2
	大正			1		
	S 1～9					畜舎1，鶏舎1
	10～19	1		2		
	20～29	2	1	2		鶏舎1
	30～39	1				
	40～	6			1	畜舎2，鶏舎1



第8図　年次別付属建物建築棟数（祢次・大在家・新在家・西真行部落）

両者を併せて，年次別の付属舎建築棟数を表わしたものが第8図である。ここから付属舎建設の盛んな時期が昭和初期から続いており，昭和40年以降急増する様子をうかがうことができる。

このような付属建物の増設が，上述した母屋空間の変貌と密接な関係にあることは言うまでもない。すなわち，母屋の居住空間としての純化と，付属舎における作業・収納・飼育空間の増加とは，不可分の関係にある一連の現象としてとらえることができるのである。

Ⅳ　結　　語

以上，猪苗代湖北地方における農村家屋形態の地域的特色とその変貌を考察してきたが，本研究で得た知見及びそれに伴なう筆者の見解をまとめれば，次のようになろう。

1)．昭和30年代前半の家屋タイプの分布を見ると，どの集落でもほとんどが古いタイプ

（A，B_o，C_o）で占められる。

2）．中門造民家（A）の分布に注目すると，かなり地域的な偏りや集落による差が見られ，特に長瀬川以西の平野部西半に高密分布地域をもつ。このような分布パターンに関しては，積雪深の分布や文化伝播との関係から，ある程度の解釈が可能なように思われる。

3）．現在（昭和52年）の家屋タイプの分布を見ると，過半が新しいタイプ（B_n，C_n）になっており，急激に変貌してきた姿を現わしている。

4）．事例集落の分析から，母屋形態の変貌を辿ると，一般に広いドマニワと内厩をもつ伝統的農村家屋から，様々な改造・新築の過程を経て，土間部分の少ない近代的な住居へと変化していく。すなわち，作業・収納・飼育空間等を含む複合機能型の母屋から，居住中心の単一機能型母屋への変化と言うことができる。

5）．このような母屋形態の変化と照応して，付属建物とその構成にも大きな変化があり，特に大型作業舎の建設を中心として作業・収納・飼育空間の増強が進んでいる。

最後に，特に家屋形態の変貌に関して，一般的な図式への整理を試み，本研究の意義と位置づけ及び今後への展望を考えてみよう。前稿（1977b）において述べた如く，初期の作業舎建設，母屋ドマニワの板敷化の動き[16]，と戦後30年代以降の急激な母屋の新改築，大型作業舎を中心とする付属舎の建設の動き，との間にはその状況にある程度の質的な違いがあり，筆者はこれを第1期及び第2期の付属舎分離・建設期とした。本稿においても，これに従って，戦前から戦後比較的早い時期（第8図の付属舎建築数から見て，一応昭和5年頃から昭和20年代まで）を第1期，戦後昭和30年以降を第2期の家屋形態変化期とし，

第5表　家屋形態変化の模式

		第　1　期	第　2　期
母屋	格式空間	変化少ない	比較的変化少ない
	日常居住空間・生活行為空間	拡大（土間板じき化）	近代化｛台所改造 浴室・便所の区画・改造 居室の増加｝
	作業・収納空間	縮少	ほとんど消失 or休閑化
	飼育空間	変化少ない	消失or 休閑化・収納空間化
付属舎	日常居住空間・生活行為空間	比較的変化少ない 一部拡大（浴舎等）	一部拡大（離れ） 一部縮少（浴舎）
	作業・収納空間	拡大（作業舎，物置）	顕著に拡大（大型作業舎，機械小屋，倉庫等） 一部縮少（穀入れ，板倉等）
	飼育空間	変化少ない	拡大（畜舎） 一部縮少（鶏舎等）

16）これについて，下河辺（1959，1962），扇田（1955），佐々木・江崎（1961）等，建築計画学や生活科学における農村住宅研究からの諸報告があることは，前稿（1977b）でも述べた。

本地域における母屋及び付属建物の変化の傾向を，各機能空間を考慮してまとめたものが，第5表である。第1期，第2期を通じて，基本的には母屋内の居住空間の拡大が続くが，第1期の段階ではまだドマニワや内厩が残存し，伝統的な形態を保持していたのに対し，第2期に至って，大規模な新改築による母屋空間の近代化が行なわれたと言える。

さて，以上のような変化の図式は，本研究の対象地域のうち，特に平野部の諸集落を念頭において考えたものであるが，もちろんここでの事例のみに限定されず，ある程度まで東北地方の農村家屋一般に敷衍できるものと考えられる。本地域は，冬季寒冷多雪であり，農家の諸機能が母屋に集中して，付属舎をほとんどもたない，いわゆる単棟集中方式（佐藤1962，参照）の家屋型式が特色であったが，少なくとも，類似の条件をもつ東北日本の日本海側諸地域の平野部農村については，一般的な図式としてあてはまり得るものと，考えている[17]。なお，仙台平野等早くから作業舎や外厩が建っていた太平洋側諸地域或は付属舎建設の動きが，現在なお停滞している山間諸地域に関しては，上記の図式にある程度の修正が必要と思われるが，この点に関しては，さらに比較地理学的な検討を進めていきたい。

本研究の一部は，1978年度東北地理学会秋季学術大会において，中間的に報告した。本研究の遂行にあたり，東北大学理学部地理学教室設楽　寛先生には貴重な資料の提供をいただき，また猪苗代町役場税務課・総務課，猪苗代町内農家の各位には積極的な御協力をいただいた。なお，調査費用の1部には昭和53年度文部省科学研究費補助金，奨励研究（A），課題番号378094，を使用した。以上，記して謝意を表する。

文　献

海老沢寛(1966)：会津地方における中門造の分布．東北地理，**18**，163～166.

Furuya, Takahiko (1965) : The Topography of the Basis of the Bantai and Nekoma Volcanoes. Sci. Repts., Tohoku Univ., 7th Ser. (Geography), **14**, 87～100.

猪苗代町誌編さん委員会(1979)：猪苗代町誌―民俗編―．猪苗代町誌出版委員会，919ps.

米田藤博(1973)：会津地方における古民家景観―中門造民家の分布と形態―．社会科研究（大阪府高等学校社会科研究会），第16号，17～34.

――――(1975)：新潟県における中門造の分布と形態．地理学報（大阪教育大学地理学教室），No.14，44～57.

草野和夫(1974)：ふくしまの民家．FCTサービス出版部，190ps.

中村嘉男(1958)：猪苗代湖北岸の湖成段丘について．東北地理，**11**，20～21.

扇田　扇(1955)：農家の土間形式の変化．日本建築学会研究報告，32号，「意匠・歴史」39～41.

小野芳次郎(1959)：山形県の中門造民家の研究―分布と実態を中心として―．山形南高校研究紀要，No.2，28～43.

佐々木嘉彦・江崎陽一郎(1961)：東北地方農家におけるニワの変化について．日本建築学会論文報告集，No.69，469～472.

佐藤甚次郎(1957)：民家（住居）．「集落地理講座」第1巻　総論，朝倉書店，167～186.

――――(1962)：日本農家の建物構成と配置方式．人文地理，**14**，445～464.

設楽　寛(1976)：磐梯山南麓平野の積雪分布（演旨）．東北地理，**28**，183.

17）筆者等（高橋・杉浦1977）が分析した横手盆地南部についても，平地部農村においては，ほぼ表の図式があてはまりそうである。

下河辺千穂子(1959)：農家建物の空間構成の変化—農業生産の展開を中心として—．農村建築，42・43号，1～17．
————(1962)：農家建物における農用空間の建築計画的研究．農業技術研究所報告H，No.28，207～245．
須藤　賢(1955)：中門造民家の形態発生論的考察—越後を中心地域として—．人文地理，7-4，1～14．
杉本尚次(1969)：日本民家の研究—その地理学的考察—．ミネルヴァ書房，302ps.
杉浦　直(1973)：農村集落における農家の付属建物について—宮城県宮崎町の例—．東北地理，25，145～152．
————(1975)：宮城県宮崎町の農村家屋—新築農家を中心として—．地理学評論，48，297～305．
————(1977a)：東北地方における農家建物構成の地域的差異．地理学評論，50，88～102．
————(1977b)：東北地方における農家建物構成方式の成立—岩手県中部，会津地方及び仙台平野の事例から—．人文地理，29，451～482．
SUGIURA, Tadashi (1975): A Note on Accessory Buildings of Farmhouses: An Example of the Sendai Plain. Sci. Repts., Tohoku Univ., 7th Ser. (Geography), 25, 311～318.
高橋作次・杉浦　直(1977)：横手盆地南部における農村家屋形態の特色と変貌．地学雑誌，86，364～382．
田辺健一(1974)：東北地方．渡辺　光編「世界地理」，17，日本Ⅱ（第7章），朝倉書店，277～336．
安田初雄(1951)：徳川時代に於ける猪苗代湖北の交通路と集落．東北地理，4-1，42～43．